

秋以降に收容したスギ種苗の養殖特性							
【要約】 秋以降に海面生け簀に收容したスギ種苗は、水温が 22 ～ 23 ℃ 以下になると成長が悪い。そのため、水温低下時期には日間給餌率を 1 % 前後に抑えたほうが餌料転換効率も良くなることが判った。							
沖縄県水産試験場 増殖室				連絡先	098-994-3593		
部会名	水産	専門	養殖	対象	スギ	分類	指導

### 【背景・ねらい】

スギは県内で最も多く養殖されている魚種で、5月～10月にかけて種苗の收容が行われている。種苗は初夏に收容したほうが水温上昇期のため成長が早い、生産魚の周年出荷を行うためには種苗收容時期をずらす必要がある。そこで、沖縄県栽培漁業センターで2001年10月に生産した種苗を用いて養殖試験を行い、冬季のスギの養殖特性を調査し、効率的な養殖方法について検討した。

### 【成果の内容・特徴】

- ①沖縄県栽培漁業センターで生産したスギ種苗を用いて、2001年10月から県内養殖場（座間味村、名護市運天原）で養殖試験を行った。試験には5m×5m×5mの海面生簀を使用し、座間味村には1,200尾、名護市運天原には1,500尾の種苗を收容した。試験開始時の種苗の平均全長は約100mm、平均体重は約3.0gであった。
- ②各養殖場の水温は、試験開始時には25℃以上であったが、その後徐々に低下した。座間味村の水温は20℃以下になることはなかったが、名護市運天原では12月中旬以降20℃を下回る日が続いた（図1）。
- ③2001年10月～2002年9月までの平均体重の変化を図2に示した。両養殖場とも水温が22～23℃以下になる12月～4月にかけて成長は悪かった。しかし、水温が上昇するにつれて急成長し、約11ヶ月で平均体重は2,000gを超えた。
- ④座間味村と名護市運天原で行った試験の日間給餌率と餌料転換効率を図3に示した。座間味村の2月～4月の日間給餌率は3.7%と高く、その期間の餌料転換効率は27.0%と効率が悪かった。
- ⑤名護市運天原の12月～4月の日間給餌率は1%以下と低かったが、その期間の餌料転換効率は77.5～81.3%と好成績であった。
- ⑥以上の結果から、水温が22～23℃以下になると日間給餌率を1%前後に抑えたほうが、効率の良い養殖を行えることが判った。

### 【成果の活用面・留意点】

- ①秋以降に收容したスギ種苗の養殖特性である。
- ②餌の種類は養殖場により異なる。
- ③水温が22～23℃程度であれば餌食いはそれほど落ちない。そのため、飽食量給餌してしまう傾向があるので、給餌の際には注意が必要である。

【具体的データ】

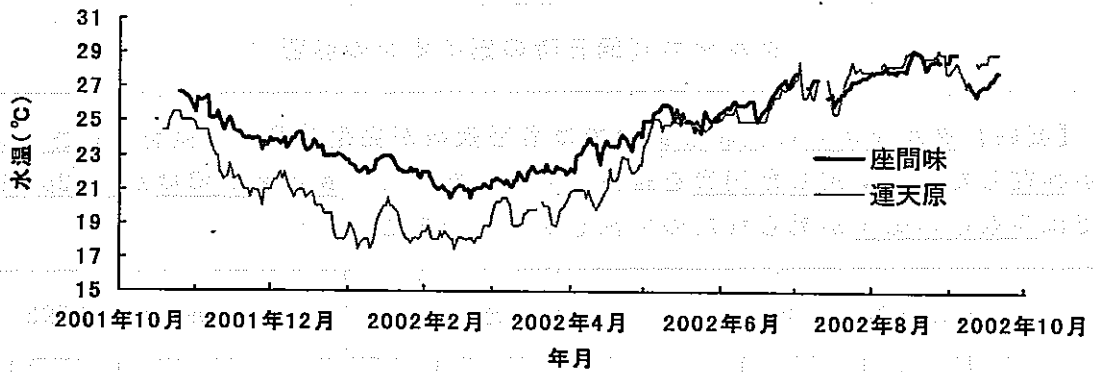


図1. 養殖場の水温(2001年10月～2002年10月)

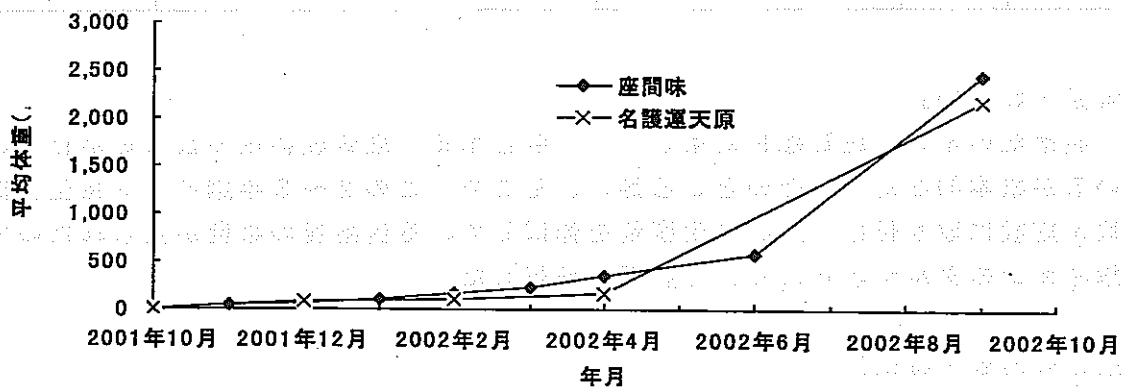


図2. スギ養殖試験での平均体重の変化(2001年10月～2002年9月)

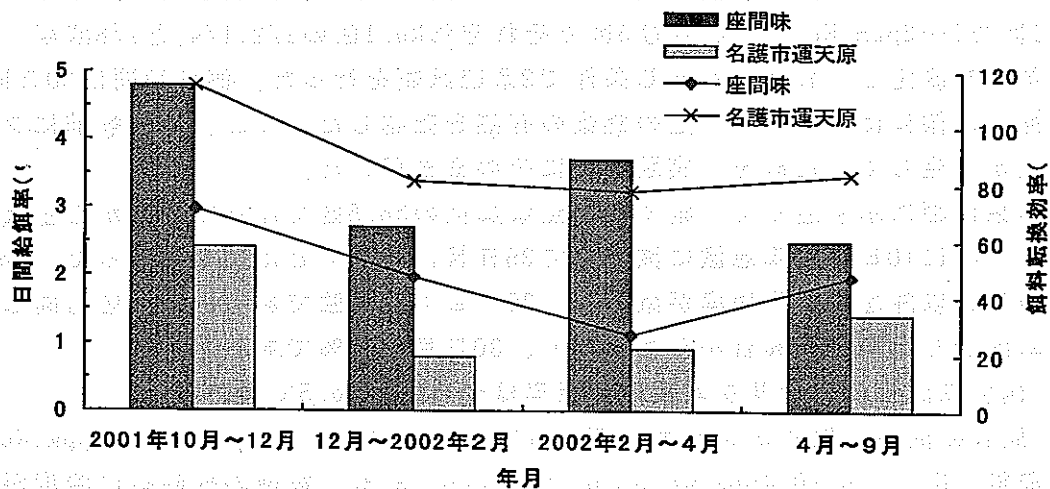


図3. 座間味と名護市運天原の日間給餌率(棒状)と餌料転換効率(折れ線)の比較

【その他】

研究課題名：スギ・トコブシ養殖推進事業

予算区分：県単（平成13～14年度）

研究担当者：中村博幸・佐多忠夫

研究論文等：平成13年度沖縄県水産試験場事業報告書

平成14年度沖縄県水産試験場事業報告書掲載予定